

# 風景の錯綜体としての「わたしの風景」

田村 剛

## はじめに

京都市内には町家をはじめ、神社仏閣など、歴史や文化をイメージさせる景観資源が豊富にある。それら資源は保存や保全の対象となるだけでなく都市計画において重要視され、京都市全域の景観形成の方向性を決定付けるものとして、景観地区計画書のデザイン基準に組み込まれている。たとえば「市街地型美観形成地区」<sup>1)</sup>の外壁の基準には、「歴史的な町並みや京都の生活の中から生み出された特徴ある建造物と調和した形態意匠とすること」(「京都都市計画」別表17)のように示されている<sup>2)</sup>。これまで、都市開発による風景の破壊や喪失に直面した私たちは、このような、景観に配慮したデザインを求めてきた。しかし今日、そういった景観デザインがはたして「風景」をつくるのか、という疑問が、実感を伴ってもたれ始めているのではないだろうか。一般に膾炙した、いわゆる「京都」のイメージが、自分の生活の場としての京都のイメージから乖離していることを多くの住民が認識し始め、行政も対応を始めている<sup>3)</sup>。自明の理であるが、社会的に認識されている風景は、個人が経験する風景に合致するものではない。自分の実体験に目を向けた風景への希求は、これまでの偏ったまなざしを修正したいという欲求に裏打ちされたものであり、同時にこうした希求は、社会的な風景から各人が経験する個人的な風景へと、風景に対するまなざしが移行しつつあることを示しているように思える。これまでも、歴史学者のアラン・コルバンや、哲学者のオギュスタン・ベルクらによって個人的な風景の重要性は指摘されてきた。とはいえ、そもそもの風景体験については、個人の主観の産物として学問の対象からは外されてきた<sup>4)</sup>。

本稿では、はじめに、先行研究者が提起した風景構造がもつシステムを考察し、このシステムが、風景の固定化及び風景の多様性を減ずる働きを有していることを示す。次に、個人的体験としての風景を、画像と聴き取り調査からあぶり出し、これを先の風景構造と照らし合わせることで、最終的には個人的な風景が他の人々と共有されうるものであることを確認する。筆者は、個人的な風景の中でも、とりわけ、風景が言語化される以前に自分自身の中でイメージ化される過程を「わたしの風景」として注目したい。また、「わたしの風景」は、すべてイメージとして認識されているわけではない。このような、風景像として自分自身の前に現れる可能性をもつが、他者にとっては隠れた経験として潜在する「わたしの風景」群を「風景の錯綜体」として捉え、風景——個々人の実世界の認識の仕方——の多様性に関わっていることを示したい。風景と「わたしの風景」との関係、「わたしの風景」と「風景の錯綜体」との関係については、本稿の第3章で検証する。

## 1 個人的な風景経験と社会的風景

### 1.1 動的な個人的風景体験

風景を意識するのは、日常的な生活活動、とくに移動中が多いという特徴が、滝波章弘による「好きな風景」の調査の分析によって示されている（滝波 2005: 206-10）。また、滝波による「風景日記」の分析から、個人として「風景を見た」という経験が、季節の変化を契機としていることが多いということが読み取れる（滝波 2005: 229）。季節の変化とは、たとえば、寒い冬が終わりかけて少しずつ暖かい日差しを感じ始め、梅の花がほころび、そして桃の花が満開を迎えるころ、桜が少しずつ開き始めるといった自然現象の変化である。私たちは、自然現象の変化に気付く、あるいは自然現象の変化によって変化——少し歩いただけで汗ばむようになった、など——を体感して季節の変化に気付く。このように、季節の変化はそれまでの状況が変化したことに気付かせることで、既知であったものが未知のものとして見えるという心理的に動的な経験をさせる。このような、個人的な風景経験に至る可能性のある物理的にも心理的にも動的な眺めは、「多くの視覚像の継起的体験の結合によって得られる像はしだいにカッキリとした視覚像から心象に近づいて」（中村 2000: 48）いく。したがって、環境が個人によって「風景」として捉えられる経験そのものは、動的で曖昧で、概念化が困難なもの、という理解が可能だろう。

しかし、他者に上記のような風景を提示しなければならない状況にあっては、そのような動的で曖昧な表象は据え置かれる。本来、主観的な風景の経験を相手に理解してもらうためには、相手が理解しているだろうと思われるその風景の客観的特徴や表現の仕方——社会的認識をもって見られているという風景の規範に準拠した風景や、それを基にした表現——によって語り合われることとなろう。なぜなら、そうした方が分かりやすいからである。次節では京都市の東山<sup>5)</sup>を例に、このような社会的認識としての風景へと収斂していく指向性の強さを確認する。

### 1.2 社会的風景——風景の固定化

社会的認識としての風景は、自然の風景が対象であったとしても、それらはすべて文化的な資源として認識されている。文化資源化した風景は、対象が明確になるとともに一定の見方が生じてくる。人間の目が注視できる視野は、横軸が20度、縦軸が10度で、腕を前にのぼした手のひら程度とされている（中村 2000: 46）。その範囲に明確になった対象、すなわち社会的に認識されている風景が収まる鑑賞地点が見出されるようになる。

たとえば、日本三景の一つとして著名な天橋立は、地理的には全方位から見ることが可能であるにもかかわらず、表1の四つの鑑賞地点が広く知られている。とくに、「飛竜観」は「股のぞき台」という股下からのぞいて見る場所も設置され、絵はがきで見られるような——ステレオタイプ化された——風景体験の欲求に答えている。

このような、社会的に表象され消費される風景は規範となり、翻って実際の風景のあり方に強い影響を及ぼす。中川理によれば、規範としての風景は、「更新を否定する」（中川 2008: 45）特徴をもち、専門家や民間団体、そして市民からの変化に対する強い拒否が示される対象である（中川 2008: 43）。そして規範化した風景に対しては、自然のサイクルに即した風景の変容さえ

も認めない。たとえば、京都の風景の代表格でもある「東山」は、江戸時代後期の『花洛名勝図会』にも描かれ(【図1】「東山全図其三」)、京都の住民であればどこが描かれているかをすぐに判別することができるほどに、日常的に目にする風景である。しかし、今日見られる東山は【図2(写真)】であり、【図1】と【図2】の印象は異なっている。【図1】の図会の東山は山肌が露わに描かれ、現在【図2】の、樹木が多く葉が生い茂っている東山の姿との違いは明らかである。とくに、図会【図1】の左の奥に見える比叡山は、非常に低い植生で描かれ、谷や稜線がはっきりしすぎて禿山のようにすら見える。小椋純一は、このような描かれ方について、絵画的な表現によるものではないとする。小椋は、図会の地形表現の正確さを示した上で、現在との植生の分布の比較を行った。その結果、図会が描かれた頃の比叡山の植生は、植生高が2m程度の部分が広く、また禿地も少なくなかった可能性が高い、と考察している(小椋1992ほか)。つまり、当時の比叡山には、現在のような背の高い樹木はほとんどなく、そこでは、地面も見えていたということができる。

この禿山の原因は、燃料や肥料とするために樹木などが資源として採取されていたため、当時の東山は里山として市民に利用される山であった。それがのちに、山林の保護政策で樹木の伐採が禁じられるようになる。そして、東山が眺められる対象として扱われ、審美的な評価が表れるようになり、1930年には京都の山麓一体が風致地区として指定されて自然保護が進められた。アカマツ中心であった東山は禁伐によって、自然に植生が遷移して広葉樹が混じっていく。日陰でも生育する広葉樹とは異なり、日が当たらないと生育しないアカマツは減っていき、次第に照葉樹が広がる。これは、植生遷移による林相の変化だが、風景の観点からはこの自然の変化は認められなかった。アカマツの山の風景が本来の東山の風景だとされて、アカマツの植林が行なわれるようになるのである。今日、東山の山中に入るとアカマツの林が続くが、それらは風景のための植林が生成したものなのだ。山という変化することが前提の自然が風景として見られる対象となって、規範化した風景の観点からは、自然の植生遷移でさえも風景の喪失と捉えられたのである(中川2008:43)。

## 2 社会的風景を強化するシステム

社会的に確立された「ある眺め」を基準として、私たちは、この眺めの変化を“風景の喪失”と捉える傾向にある。前章では、自然の営みの範疇と見なすことができる変化も、「風景」の観点からは認められないことがあるという事例を確認した。こういった自然の変化を風景の喪失として捉える動きは、固定的風景を前提としたものであり、変化を契機とする個人による風景体験とは異質である。だが、固定化した風景が社会での再表象によって、その認識を強化していく過程を考えれば、風景の構造がもつシステムの一つの顕れであるとみることもできる。このシステム——風景が個人によって経験されて表象され、社会化して見方が固定化する、そしてまたそれが個人の風景経験に作用する——の特性を、地理哲学者の木岡伸夫は、風景を3層の構造に図式化して示している(木岡2007)。本章では、木岡が提示した風景の構造を、個人的風景、社会的風景の観点から見ることによって、「風景」とは、社会的な風景認識に準拠した認識に収斂するシステムであることを確認する。また、個人的な嗜好性に関する問いに対する、

個人の表現の仕方について、その検証手段に、「あんぶら（京都市未来まちづくり100人委員会プロジェクトチーム）」の記録<sup>6)</sup>を使用する。

## 2.1 風景の三層構造

木岡は風景を、「基本風景」、「原風景」、「表現的風景」の3層に分類し、それらを「基本風景」を底辺としたピラミッド構造【図3】で表している。本節では、この概念図を参照しつつ、風景の個人的—社会的認識の間の位置づけに注目して読み替えを行なう。

### 2.1.1 「基本風景」

「基本風景」とは、個人的水準で経験されてはいるが語られない風景、すなわち弁別できていないので言語化されずに「見えていない」かのように考えられる風景を指す。先の例で表現すれば、燃料の採集地であった東山は、市民にとっては経済的活動の現場として日常的に過ぎて対象化されず、概念化することができなかった。ゆえに、市民個々人の風景として語りの対象にはなっていなかった。このような、環境として経験されてはいても、概念化されていないという「基本風景」の性質から、「想起される以前の個人的風景（以下〈個人的風景〉と記す）」と表すこととする。

### 2.1.2 「原風景」

このような沈黙のうちにある風景——〈個人的風景〉——が、何らかの契機（自身の風景体験が概念化する過程を生み出す契機）を得て語りが発生する。風景には、ある個人の語りから人々の間でのさまざまな語りを通じて、不明確ではあるが「型」と呼べるような思い浮かべることができるイメージが生じてくる過程がある。たとえば「ふるさと」という語から想起される、ある共同体において共有可能な像が、この「原風景」の層の風景にあたる。この「原風景」は、個人による風景の語りに端を発し、社会的に認識された風景までを含んでいることから、ここでは、「個人的—社会的認識の間で表象されている風景（以下〈個人的—社会的風景〉と記す）」とする。

### 2.1.3 「表現的風景」

前述した、「原風景」の層にある未定形の「型」から個性的な表現が「形」として出現する。その一例として、『花洛名勝図会』に名勝として表現された東山の風景が挙げられる。それまで何となくお互いに理解していた曖昧な東山の風景が、“こういうものである”という宣言のもとに表現されたのである。この層に至った風景は、アカマツの植生が本来の東山の風景だとして考えられたように、やがて、社会的な認識となって固定化していく。この「表現的風景」は、「原風景」の層を通過せずに、つまり、ある共同体での共有の経過を踏まえずに、口伝されていない形が「型破り」に表現されることも、木岡は想定している（2007: 184）。たとえば、芸術家による表現などがそれにあたる。とはいえ、明確なイメージを提示された風景が規範化する経緯を考えれば、ここでの風景は、「社会的な認識のもとに表象される風景（以下〈社会的風景〉と記す）」として捉えることができるだろう。

そして、この明確な「形」として出現した風景は、今度は風景に関する社会認識から個人のそれに至るまで影響を及ぼす。このように、木岡は風景の構造が、図3の上下の矢印が示す上昇と下降のシステムを有しているものとして提示した。このような個人の風景経験が純粹に個人的ではないというところに、風景の特徴があると考えられるのである。それは、風景の扱いを困難にするものでもあり同時に、個人的な風景が完全な特殊性のもとにあるのではないことも意味している。つまり風景は、それが如何に「個人的」であろうとも、本質として社会性を有しているのである。しかし同時に、このような風景の構造が閉鎖的であるとすれば、風景の多様性を減じ、その見方を固定化させる危険性をはらんでいる。それは、東山の風景の例からも見て取れるのではないだろうか。

## 2.2 風景の社会化：＜個人的風景＞から＜個人的—社会的風景＞への上昇

風景が意識される契機は、次のような身体的な経験に似ていると思われる。普段私たちは徒歩で移動しているときに、足の運び方を含む身体の動きを意識していない。しかし、たとえば足を捻挫した場合には足の運びを意識するようになる。さらに、段差があったりすると、より意識して足の運びを考えなければならなくなる。同様に、日常生活では意識されることのなかった環境世界の眺めは、それまで存在しなかった異物が入り込んできたり、あるいはそれまであったものが喪失したりすることによって意識されるようになる。このように風景は、環境世界の中に、「それまで存在しなかった異物」や「それまであったもの」といった「図」の発生がなければ意識され難いものである。とはいえ、普段の足の運びも、意識されていないだけで行われているのと同様に、意識されない環境世界には、既に「図」に反転する可能性をもった「地」が存在し、これらが潜在的な風景経験の「錯綜体」<sup>7)</sup>を構成していると考えられることができる。しかし本稿では、個人に埋没している風景経験ではなく社会で共有される風景に焦点を当てているため、この「風景経験の錯綜体」とは分けて「風景の錯綜体」を設定する。

自身の脳裏にある風景は、上記のような錯綜体から、何らかの契機によって浮かび上がってくる。それを誰かに提示しようとするとき、風景は、極めて個人的な体験であったものが、個人的—社会的な認識の間に位置するものとなる。そのような風景に関して次の問題が存在している。すなわち、ある人によって表現された風景が、その人の個人的な風景なのか、社会的な認識に影響を受けたものなのか、それらはまたどの程度の影響を受けているのかの判断は、受け取る側の想像でしかない。それゆえ、風景を収集したとしても、それが個人的—社会的認識の間にどのように位置づけられる風景なのかは分からない。また、風景を提示した個人が、どのような影響下でそう認識することになったかを判断することは不可能である。本章では、まず“個人的な”風景について、個人がどのように語るかを検証する。具体的には、2011年2月から2011年9月の間に実施した聴き取り調査50数件のうち、個人的に好んでいる場所として風景的内容が示された中から数件を取り上げて画像情報を確認する。そして、風景を提示した理由や感情などの聴き取りを基に、風景の「個人的—社会的」な性質について考察する。この調査方法を通じて、それぞれの調査対象者が風景を語る以前に自分自身のなかで風景像をイメージしていることを検証する。

### 2.2.1 “個人的な”風景——「あんぶら」による聴き取り調査より

「あんぶら」による「個人的に好きな場所」の聴き取りは、以下の条件で行なわれた。調査の目的は収集した情報の公開にあり、具体的な事実の収集が求められたことから、調査表（質問項目は次の通り。①場所の詳細、②その場所への交通機関<sup>8)</sup>、③その場所を好きな理由、④写真を撮るアングル）を使用した半構造化インタビュー<sup>9)</sup>の方式を採用した。対面、記述に限らず、対応は個別に行なった。聴き取り対象者から場所の写真の提供がない場合は、質問項目①、④を参考に撮影して、対象者に画像の確認を取った。

本調査結果をみると、「風景」の典型でもある自然風景を対象とした【図4（日向大神宮）<sup>ひむかい</sup>】や、あるいは定式化した「京都らしい」風景の提示とみることができる【図5（上京区大黒町）】のような風景、または観光名所としても認識されている【図6（東本願寺）】のように、風景的要素が明確だと考えることができる風景が挙げられている。これらは、ガイドマップに掲載されるような風景と言ってよいのではないかと筆者は、【図4, 5, 6】について、社会的に認識されている風景、あるいは風景らしい風景という印象をもった。【図7（いのちの森）】や【図8（北白川疏水道）】は、草木があるとはいえ、自然風景とは言いがたい。また、場所や風景の中心的な要素といえる対象物もない<sup>10)</sup>。【図4, 5, 6】のように、タイプに分類するとすれば、両者ともに道であるといったところだろうか。道であるということは、本稿の1.1で示した個人的な風景体験の例に倣うような、移動中の経験であることも読み取れる。したがって、【図7, 8】は、【図4, 5, 6】と比較して、より個人的な風景体験に基づいたものと思われる。

筆者はこのように、どちらかといえば社会的な風景認識に基づいた、風景として見られた理由が分かりやすいものと、視覚像としては風景として特徴的なものがあるわけではないが、何らかの重要な個人的体験があったのだらうと考えられるものにと、大きく二つに分けて解釈した。しかし、風景情報の提供者のコメントからは、画像からの解釈とは異なる提供者の心象を読み取ることができる。ここでは、筆者の画像解釈と提供者のコメントとの違いが顕著であった【図6（東本願寺）】の風景に対するコメント（提供者：MT氏）に注目する。筆者は、【図6】を観光名所としての風景として解釈したが、提供者にとっての風景体験は、より個人的であることが示されている。

私は幼い頃、毎日のように祖母に連れられ東本願寺の御影堂にお参りしていました。東本願寺は亡き祖母との思い出の残る大切な場所です。東本願寺前にあるハスの形をした噴水から見える本願寺の荘厳な風景が私は気に入っています。<sup>11)</sup>

このコメントで、MT氏は、「本願寺の荘厳な風景が私は気に入っています」と述べていることから、祖母との参拝という幼い頃の記憶によって、より一層その風景への思いが際立たせられていることが推測できる。また、言葉によって表現されたこの風景において、MT氏は個別の要素についての説明をしていない。単に思い出と印象を語っているだけのようにも見えるが、風景を問われて出てきたものがMT氏にとってはこの風景であり、同時にこの風景から想起される思いが語られているとも考えられる。一方で、MT氏の例とは異なって、【図9（京都市立動物園の観覧車）】のYF氏によるコメントに見られるように、社会的な評価（「朝日新聞の『勝

手に関西世界遺産』に認定) や著名な対象物 (「美術館」, 「京都会館」) によって表される風景も存在する。

昭和 31 年に作られた日本で 2 番目に古い観覧車です。朝日新聞の「勝手に関西世界遺産」に認定されました。小さな観覧車ですが、岡崎には高い建物が無いので、岡崎を見渡せる唯一の場所です。美術館が見下ろせて、京都会館も見えます。<sup>12)</sup>

このコメントにおいて、YF 氏自身が体験したことを示す語句は、地域や建物が観覧車から「見える」ことに止められる。説明的であることについては、場所の詳細や交通機関を問う質問項目が影響している可能性も考えられるが、YF 氏がこの場所を提示した理由は、非常に客観的だと捉えることができるだろう。このような説明的な表現をする傾向は、収集活動を行なったメンバーの実感として、社会的活動を行なっている人に多く見られたということである。YF 氏のコメントのように、個人的な風景経験の聴き取り調査にもかかわらず、その回答に社会的な認識を加味したものが含まれるのは何故だろうか。その理由は、「ある経験をすぐに語るができない場合、活発に行動する人 (いわゆる『精力家』) によく見られる反応は、その経験は私的なものなので (そして、ある個人に独特のものですらあるので) 重要ではない」(イーファー・トゥアン 2011: 18) というイーファー・トゥアンの見解に沿うものかもしれない。しかし、こういった表現をする傾向は「精力家」に限ったことではなく、いわゆる「素人」もまた、そういった社会的な認識を受け入れる傾向にあるという (トゥアン 2011: 19)。そこで、次節ではこの傾向を、風景構造における個人的風景と社会的風景の相互影響から検討する。

## 2.2.2 語りで生じる“個人的な”風景の変異

木岡が風景を構造化するときに述べているように、「個人的意識と集合的意識とが分節化されるような社会的経験の水準が出現して、はじめてそれ以前の個人的経験を考えることができる」(木岡 2007: 119) ので、「社会的経験に媒介されない個人的経験を個人的ということとはできない」(木岡 2007: 119)。その意味では、“個人的な”風景は、風景構造【図 3】における上位の風景との関わりを前提としている。

また、<個人的—社会的風景>の層にある風景と、<個人的風景>の層にある風景との構造上の特徴的な相違点は、その風景が語られているか否かである。筆者らが収集したような、個人的な嗜好について語るという行為においても、言語化しがたい風景の経験という性質から、正確には語りえないうえに、自身でも脳裏にあるイメージと語る内容とのズレを感じて難しさを認識する。したがって、聞き手に伝えたいという欲求は、分かりにくく語りにくい自分のイメージをそのまま伝えるよりも、聞き手が分かるように社会的な風景認識を用いたり、社会的に承認されている風景を提示したりするという行為に向わせるのだろう。

このような、伝えようとするために生じる風景の誤解に加えて、風景は構造的にもある眺めへと収斂するシステムになっている。<個人的風景>から<個人的—社会的風景>、そして<社会的風景>となっていく過程においても、<個人的風景>から多くの情報が削ぎ落とされて、社会的な理解が得られるものへと変形していく。そのような最大公約数的な風景が準拠枠とな

り、個人的な風景経験にも影響を及ぼす。そして〈社会的風景〉に影響を受けて経験された、変形した〈個人的風景〉の〈個人的—社会的風景〉、〈社会的風景〉への上昇によって、それら上位層の風景の特徴は、より一層強化される。このような働きをもつ風景の構造と上昇・下降のシステムのおかげで、必然的に、語られる風景も風景認識や風景の見方も固定化していく。したがって、“風景を語る”ことがすなわち、曖昧で不明瞭であった多様な風景イメージが特定のイメージへと定着していくきっかけになっている。

では、そもそも個人的な風景が社会に開示される、〈個人的風景〉から〈個人的—社会的風景〉への移行は、何が契機となるのだろうか。

### 3 風景の多様性の確保のために

#### 3.1 自身への風景の表現——「わたしの風景」

木岡は、風景を構造化する最初の契機を、本稿で言う〈個人的風景〉とし、その領域にある風景は他者と語り合うことに向かう「表現の欲求を胚胎している」（木岡 2007: 198）と述べる。そして、個々の発話を〈個人的風景〉の領域から〈個人的—社会的風景〉の領域に移行する契機として設定している。

だが、語られる以前の個人的風景——木岡の言葉では「無言の経験」（木岡 2007: 198）——が表現の欲求を内包しているということ、すなわち想起されることによって自動的に語られるに至るという前提については疑義がある。これは、個人的経験における風景が風景構造の土台として重要であるとしても、それが共有されなければ「風景」として成立しないこと、あるいは成立しなければ、社会の中で個人的経験としても表出しないという風景の特性があるからだと考えられる。しかし、木岡が風景構造の基底に置く「基本風景」は「風景経験における無言の水準」（木岡 2007: 198）とするように、風景は語られる以前に既に個人的水準で経験されている。つまり、“風景を語る”という行為の前には、視覚像が心象を伴って自分自身の脳裏にイメージとして浮かび上がる。そこにおいては、まずイメージがあって、それを言葉に変換しつつ他者に語るという過程が、“風景を語る”という行為だと考えられるのである。風景が自身の脳裏に浮かび上がったとしても、言語にするのが困難なので語るのを諦める、あるいは語りの欲求を感じない状態では、風景は語られるに至らない<sup>13)</sup>。そして、他者にとっては語られることによるのみ、風景がイメージされたことが確認できるために、語られた風景のみが語り手によってイメージされた風景だと捉えられてしまう。しかし、繰り返しになるが、木岡が風景の基底に「基本風景」を置くように、風景は語られる以前に既に存在している。このようなことから、風景は、他者には語られていなくてもイメージされた段階で自分自身に対しては表現されているのである。筆者はこのような、〈個人的風景〉と〈個人的—社会的風景〉とを媒介するものとして、〈個人的風景〉の範疇から移行しようとしつつも、これまで個人の中にひたすら隠れてきた、語りとして発露する以前の風景を、仮に「わたしの風景」と呼んでいる。この区別によって、これまで語られることによるのみ存在していた風景全体の基盤となる個々人の風景が、語られていなくても存在していることをより明白にできると考えられるのである。本稿の2.2.2で述べたように、風景は、風景構造のシステムによって「ある眺め」へと固定化されていくが、〈



個人的風景>が多様性を担保できれば、風景は多様性を保持できる。もちろん「わたしの風景」は、語られない場合には再び風景上の地となって意識されなくなる可能性があるが、しかし、語ろうとして風景をイメージすること自体が、風景構造に新たな風景を取り入れる機会となるだろう。しかし同時に、「わたしの風景」もまた社会的影響の下にある。それゆえに、自身にとって風景として見えるかたちで現れる「わたしの風景」の存在は、他者の<個人的風景>とも関係する風景の錯綜体として考えることができるのである。

### 3.2 「わたしの風景」の収集

風景の構造がもつ社会的風景>へと収斂する指向性は、類型的な風景の景観化、あるいは風景の解としての景観デザインも有しているのではないか。公共の空間を対象とする景観計画の根拠は、根源的には多様な「わたしの風景」(=錯綜体としての風景)であったにもかかわらず、社会で合意される風景へと方向付けられ、「私」自身が経験してきた風景とは異なる空間へと変貌させる危険性を十分に有している。1980年代から日本では、眺めに対して風景よりも景観という言葉が多く使われるようになり、「眺めが制御・コントロールするものとして捉えられ」(中川 2010: 101) となった。「景観」として工学的対象になった「風景」と個人による風景体験との違いが、ベルクが言う、ほかとは弁別されて省察される<風景としての知 (pensée du paysage)>における風景と、それ以前の原初的な<風景という知 (pensée paysagère)>における風景との違いであろう(ベルク 2011)。風景を豊かにする可能性を高める風景の多様性の保持という観点から、<風景という知>の概念は非常に重要だと考えられるが、ベルクはそれが、どのように<sup>・</sup>つ<sup>・</sup>く<sup>・</sup>り<sup>・</sup>上<sup>・</sup>げ<sup>・</sup>ら<sup>・</sup>れ<sup>・</sup>る<sup>・</sup>の<sup>・</sup>か<sup>・</sup>についてを明確に示していない。ベルクは、陶淵明の「飲酒、其の五」という詩を挙げて次のように指摘する。「詩人が目にしている情景の雰囲気のうち」(ベルク 2011: 63)にある「風景の<真正さ>」(ベルク 2011: 63)、「風景の深い意味=おもむき」(ベルク 2011: 93)は語りえない、と。そして、語りえないこれらを「風景的な知の高次の次元」(ベルク 2011: 64)としている。彼はさらに、私たちが現実の風景として見ているのは、風景として見たある環境であること、つまり風景とは、ある環境が解釈の方向に向かって知覚されているものであるということを理解すべきだと唱えている<sup>14)</sup>。また、主観か客観かといった精神と物体とに分ける二元論ではなく、「すべては物体を有しながら精神に向かう」(ベルク 2011: 71, 第5章表題)、この「往き来……から風景が生まれる」(ベルク 2011: 114)という。<風景という知>は、語りえない中にこそあるということ、同時に、ある環境という実体をもったものと、自身との間のやり取りの中からイメージされてくるものであるということが示されていると考えられる。ここから、<風景という知>を醸成していくには、社会的通念として承認されている風景ではなく、概念として理解されている風景でもなく、主観に過ぎないとして社会的な表象からも、私的な語りからも省かれかねない風景の経験、説明できない情感を伴って経験されてきた個人的な風景を、幾度となく追体験していくことしかないのではないかと考えるのである。

この結論に至って、前節で述べた、風景を語る以前に自身に対して風景像をイメージするという方法で風景を表現していることの重要性が理解されるのではないだろうか。確かに、個人の風景体験そのものを収集することができないという風景の性質によって、「わたしの風景」と

はいえ厳密に＜個人的風景＞が表現されたものではない。「わたしの風景」を語る過程でも、イメージされたものと語られたものとは異なる。しかし、聴き取り調査の対象者が「わたしの風景」を語ろうとすることによってそれがイメージされることは、この調査を通じて、彼らに自身の風景を迫体験させるということなのだ。このような手法で「わたしの風景」を収集することの意義は、多様な風景を蓄積することだけではなく、風景を環境と自身とのやり取りからイメージするという行為を引き出すことにあると考えられる。

### おわりに

風景経験は、個人的で特殊であると考えられている場合が多い。しかし実際には、風景は、個人的な経験から、社会的な風景認識に由来するもの間で揺れている。また、個人的で特殊な経験に由来する風景は、それが個人的であればあるほど、他者との共有性が低いために語られにくい。一方で、社会的な観点からの風景は、社会的通念を基にしているために共有されやすく、社会の中で繰り返して語られることになる。このような語られ方の幅は、語り手だけでなく、語り手と聞き手との関係性や周囲の環境、あるいは時間なども関与すると思われる。問い方に関係なく風景はこのように幅をもって表されることから、「わたしの風景」として表現されたものもまた、これらの違いを含んでいることを前提として考えなければならぬだろう。ただし筆者は、「わたしの風景」の語りの中に、社会に向かって語られにくい、社会的影響が少ない特殊なイメージが表出する可能性を重要視している。なぜなら、個人的で特殊な風景経験の発信こそ、隠れている多様な風景を個人的—社会的な間での語りの層へと引き上げると考えられるからである。そして、これを発信しようとする行為は、行為者が、自身の風景の錯綜体にアクセスする数少ない機会であると思われる。そのような機会の蓄積が、自分自身にとって、「風景」とはどのようなものかについて考えることを促し、風景が存在する場所、地域、環境と自分との関係性を意識する契機となるのではないだろうか。曖昧模糊とした風景体験から風景をイメージしようとする努力によって、単なる環境世界から風景——社会的規範などからの影響があるとしても——を見る契機を獲得するのだと考えている。

#### [追記]

本稿における研究は、2012年12月2日に開催されたアート・ドキュメンテーション学会第5回秋季研究発表会における報告「風景のドキュメンテーション：“個人的な”風景の収集調査」（住田翔子・要真理子との共同発表）に引き継がれている。そこでは、「“個人的な”風景」の聴き取りの方法を検討して、「わたしの風景」をイメージさせることを念頭に置きインタビュー内容を組み立てた。そこから、「わたしの風景」の聴き取りが、聴き取り対象者の風景のイメージ化／概念化の一助となり、そこでイメージ化された内容物を「“個人的な”風景」のデータとして扱う可能性を見出した。今後は、「わたしの風景」という主観の対象の整理、活用法についていっそう深化させていきたい。

注

- 1) 美観地区の面積の約 20% を占める。指定されている地域は、1938 年頃から市街化した地域が多い。
- 2) そのほかの地区も、歴史遺産型的美観地区を除いても、概ね同様の文言か、和風であることが基準とされている。
- 3) 京都市は市民のそういった意識を取り入れ、2007 年に改正した景観条例を今も検証し続けている。2011 年の改訂では、地域での検討を経ていれば、条例で定められているデザインの基準との齟齬も認められるようになった。京都市では、これを「景観計画の進化」としている。
- 4) 木岡によれば、「従来風景が論じられてきたのは、風景画などの表現を対象とする芸術論・文化論以外には、『景観』をキーワードに持つ地理学、さらに建築学・造園学・景観工学・都市工学等の技術的な分野においてであった」(木岡 2007: 4)。
- 5) 京都の東に見える山麓を指す。一般的には、北は比叡山(京都市左京区、滋賀県大津市)から南は稲荷山(京都市伏見区)までとされる。
- 6) 「あんぶら」による風景の収集活動は、このような個人的経験としての風景、心象と現実が混ざり合っ  
て経験される風景、「風景を説明する」というスタンスでは表現されにくい風景に注目している。
- 7) 身体の動きは、顕れた動きだけが動きとして認識することができる。しかし、その身体の動きは、潜在したままで顕れなかった多くの身体の動きを見えない背景としてもっている。市川浩は、身体のこのような性質に対して、ポール・ヴァレリーの「錯綜体」の概念を使用して、「現実的統合としての身体は、可能的な錯綜体に支えられてはじめて存在する。……統合が達成されることによって、錯綜体は意識化に沈められる」(市川 2002: 121)と述べる。風景もまた、環境での潜在的な経験を含むそれらの存在によっ  
てはじめて顕現する可能性を有する。風景として顕現したものだけが認識できるため、潜在的な経験が  
どのようなボリュームで、どのような内容をもって意識化に隠れているかを認識することはできない。  
風景がこのような経験であることから、風景として顕現しなかった経験を表すために、「錯綜体」の概  
念を適用した。
- 8) 「②その場所への交通機関」の項目の設置は、「あんぶら」の活動内容がまちを歩くことを基盤として  
いたため。また、「あんぶら」は紙面などを通じて、収集した好きな場所の情報を公開していた。情報  
の公開は、その場所が、「〇〇さんが好きだと言う場所」という意識をもたせることで、人と場所(地域)  
とを繋げて考える機会をつくることが主要な目的とされていた。
- 9) 半構造化インタビューとは、大まかな質問項目を設定しておき、回答に対して詳細を聞き取っていく  
インタビュー手法で、統計的調査と質的調査の両方の側面を併せもつ。質問項目を定めない非構造化イ  
ンタビューは、インタビューに技術を要するため、質問項目を参照しながら行なう半構造化インタビュー  
の手法を採用した。
- 10) 図 7 には写真の奥に京都タワーがあるが、これは場所の特定がしやすいように「あんぶら」が写真の  
アングルを調整して、画像提供したものである。聞き取りの対象者のコメントには、京都タワー等への  
言及はない。以下は、TA 氏への聞き取りコメント。「現在水族館の建設が進んでいる梅小路公園ですが、  
芝生広場を囲うようにしてできている『いのちの森』という散歩コースは、夏はひんやりと涼しく冬は  
空気が澄んでいて散歩するには絶好の所になっています。是非一度足を運んでみてください。』
- 11) MT 氏への聞き取りコメントから一部抜粋。聞き取りは 2011 年 6 月頃に行なった。
- 12) YF 氏への聞き取りによるコメント。聞き取りは 2011 年 9 月頃に行なった。
- 13) 景観工学の樋口忠彦は、質的な性質を言葉では表現しづらいことから、「だれしも、あそこはいい所だ、  
ここはいい所だというストックは心の中にもっているのですが、なかなかそれをほかの人々と伝え合  
うことができない」(樋口 2009: 192)と述べている。
- 14) アラン・コルバンも同様に、評価システムにしたがった空間の解釈を風景だとしている(コルバン  
2007)。

文献

- 市川浩, 2002, 『精神としての身体』 講談社。
- 小椋純一, 「絵図類の考察からみた江戸末期から室町後期における京都近郊の植生景観」 京都府レッドデータブック (<http://www.pref.kyoto.jp/kankyo/rdb/eco/rs/rs03.html>)。
- 小椋純一, 1992, 『絵図から読み解く人と景観の歴史』 雄山閣出版。
- 木岡伸夫, 2007, 『風景の論理——沈黙から語りへ——』 世界思想社。
- 滝波章弘, 2005, 『遠い風景——ツーリズムの視線』 京都大学学術出版会。
- 中川理, 2010, 『風景学——風景と景観をめぐる歴史と現在』 共立出版。
- 中村良夫, 2000, 『風景学入門』 中央公論新社。
- 樋口忠彦, 2009, 『日本の景観——ふるさとの原型』 筑摩書房。
- Berque, Augustin, 2008, *La Pensée Paysagère*, Paris, Archibooks. (= 2011, 木岡伸夫訳, 『風景という知——近代のパラダイムを超えて』 世界思想社。)
- Corbin, Alain, 2001, *L'Homme dans le paysage*, Paris, Textuel. (= 2007, 小倉孝誠訳, 『風景と人間』 藤原書店。)
- Tuan, Yi-Fu, 1977, *Space and Place: The Perspective of Experience*, Minneapolis, MN: University of Minnesota Press. (= 2011, 山本浩訳, 『空間の経験——身体から都市へ』 筑摩書房。)

表 1 天橋立鑑賞地点

方位	鑑賞地点	名称
北	傘松公園	斜め一文字
南	天橋立ビューランド(文殊山山頂)	飛龍観
東	天橋立雪舟観展望休憩所	雪舟観
西	大内峠一字観公園	一字観



図 1 東山全図其三『花洛名勝図会』(1864年)



図2 現在の東山 (撮影：筆者)

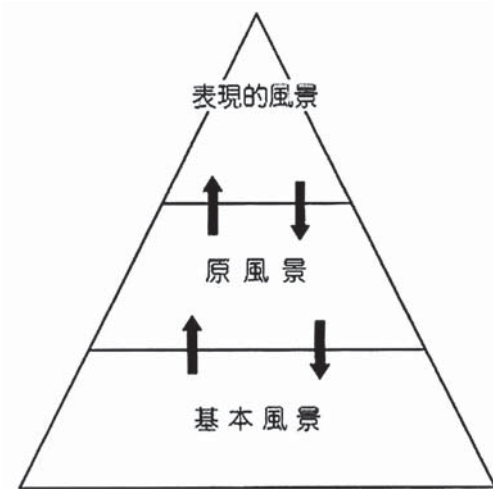


図3 風景の三層構造 (木岡 2008: 178)



図4 日向大神宮



図5 京都市上京区大黒町の町並



図6 東本願寺 噴水と御影堂門



図7 梅小路公園「いのちの森」



図8 北白川疏水道



図9 京都市立動物園の観覧車

